法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-04

危機の時代の文化多元主義 ： 雑誌『ドキュマン』とバタイユの野心

酒井, 健 / SAKAI, Takeshi

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2014-06

Hosei University Repository

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４００

研究課題名（和文）危機の時代の文化多元主義　ー　雑誌『ドキュマン』とバタイユの野心

研究課題名（英文）A cultural pluralism in the age of crisis- "Documents" and the ambition of Georges Bataille

研究代表者
酒井　健（SAKAI, Takeshi）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：７０２０５７０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897ー1962）の初期の活動、とりわけ総合的文化誌『ドキュマン』（1929ー1931）をめぐる活動を、当時の文化的背景に注目しながら解明した。視点としては文化多元主義（諸文化の多様性をそのままに肯定する立場）をとった。成果としてあげられるのは、前世紀からの西欧近代一元主義に膠着して危機的状況にあった同時代の西欧文化を、バタイユが、考古学、民族誌学、前衛芸術の最新の情報を呈示しながら、批判、相対化、活性化していった様を論文やシンポジウムを通して具体的に呈示できたことである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to explain Georges Bataille(1897-1962)'s early works, especially his articles published in his total cultural journal "Documents"(1929-1931) . Our main point of view was a cultural pluralism. As the result, we could elucidate his ambition, which consists in criticizing, relativizing and reanimating his contemporary occidental culture by up-to-date materials of archaeology, ethnography and modern arts ; the ego-centricity is his target. This elucidation was made open to the public by several articles and colloquiums.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：バタイユ　ドキュマン　フランス現代思想　民族誌学　考古学　現代アート

Hosei University Repository

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景

（１）国外および国内におけるバタイユ研究の動向

ジョルジュ・バタイユ（１８９７－１９６２）は、１９２０年代から１９６０年代にかけて活躍したフランスの学際的な文筆家であるが、その幅広さゆえに研究は本国フランスにおいてさえ著しく立ち遅れた。全集本というかたちで彼の作品が網羅的に紹介されるようになるのが１９７０年代からであり、本格的なバタイユの研究書が刊行されるようになるのは１９８０年代に入ってからである。雑誌『ドキュマン』におけるバタイユの営為に関する研究となるとさらに遅れ、１９９０年代にならなければ研究書は現れない。しかもその研究はいまだ総合的とはいえないものだった。１９９５年刊行のジョルジュ・ディディ＝ユベルマン氏の『不定形の相似』は『ドキュマン』を正面から取り上げて論じた最初の研究書であり、その意味で画期的であったが、しかし美学という一面から『ドキュマン』のバタイユを照射したという誹りを免れない。１９９７年刊行のヴァンサン・テクセラ氏の『ジョルジュ・バタイユ　芸術の部分』は一章を『ドキュマン』のバタイユに割いているが、バタイユの思想の背景の詳細にまでは立ち至っていない。他方、日本人の研究書、すなわち江沢健一郎氏の『ジョルジュ・バタイユ - 不定形の美学』（２００５年）は、日本における本格的なバタイユ美学思想の研究書であり、きわめて重要な考察に満ちているが、やはり美学の範疇に中心を置いている。

『ドキュマン』に関する総合的な研究が待たれる所以である。

（２）『ドキュマン』について

この雑誌は１９２９年４月の刊行当初から、考古学、美術、民族誌学と考察の対象を明示して、月刊で刊行された。１９３１年に終刊になるまで、バタイユは編集局長を務め、各分野の学者たちに寄稿させる一方、彼自ら毎号健筆をふるって論陣を張った。今日、研究が待たれるのは、バタイユのこの試みの全容を捉えることである。他の寄稿者たちの論文との関係、彼自身の立っていた時代と環境を勘案しながら、この雑誌に賭けたバタイユの野心を総合的に明示していくことである。

２．研究の目的

本研究は、１９２９年創刊の文化グラヴィア誌『ドキュマン』における作家バタイユの文化多元主義的な思想を総合的に解明していく。ここでいう文化多元主義とは、多様な地域の文化、多様な時代の文化に問いかけて、近代西欧文化の閉鎖的な独善性を批判し、その刷新を図る姿勢のことである。２０世紀前半、危機にあった近代西欧文化の病根をこの閉鎖性に見出し根源的刷新を迫ったバタイユの野心を、本研究はその学際性に即して総合的に明示していく。そしてさらに、その研究成果を逐一、現代の日本および先進諸国の停滞した文化への建設的批判の礎にもしていきたい。バタイユ研究から、現代人に新たな文化の展望をもたらしていくのが、本研究の狙いである。

３．研究の方法

本研究は、酒井健が単独で３年間にわたって行う。研究推進の方法としては、資料の収集と読み込み、シンポジウムの開催および海外とくにフランスでの国際シンポジウムへの参加が中心となる。

４．研究成果

（１）２０１１年度

この年度は、雑誌『ドキュマン』が対象として掲げた「考古学」「美術」「民族誌学」の内とくに民族誌学の方面に注目し、同誌の先端性を探った。まず時代背景として、19 世紀後半から始まるフランス民族誌学が 1920 年代に入り一段と新たな動きを呈するよう

Hosei University Repository

になったことを示し、それが『ドキュマン』と共通基盤を形成していたことを明示した。具体的に言えば、パリ・トロカデロ民族誌学博物館の大修復とともに非西欧世界の多様な文化遺産が、西欧中心主義的な見方から解かれて、それ自体として根源的に（それぞれの風土、宗教、生活習慣を尊重するだけの文化相対主義を超えて、深い力を表出させる表現物として）展示されるようになっていく動きが、バタイユら『ドキュマン』同人と創刊前夜から共有されており、同誌の斬新で豊富なグラヴィアと同時代批判の論文に発展していく点を明らかにした。その成果は、法政大学紀要『言語と文化』発表の論文、および同大学で開催したシンポジウム「２０１２バタイユ没後５０年に向けて―雑誌『ドキュマン』の魅力」（江澤健一郎氏との連続講演会）、さらにその報告書（『言語と文化』第９号別冊、２０１２年３月）として公表した。また２０１２年３月にフランスで開かれたバタイユ国際シンポジウムでは同誌の批判意識をそれ以後の彼の思想の進展と対比させて論じた。

（２）２０１２年度

この年度は、バタイユ没後５０年にあたり、それに関係するシンポジウムが国内外において開かれた。私自身も本務校の法政大学において公開シンポジウムを企画し開催した。具体的に報告すると、２０１２年６月３日に東京大学で開催された日本フランス語・フランス文学会のワークショップ「バタイユ没後５０年」においては、５名の発表者の１人として「異種混淆の賭博台−『ドキュマン』をめぐって」と題する発表を行い、その発表原稿を「週刊読書人」２０１２年８月１０日号に上梓した。また６月６日にはバタイユ編集『ニーチェ覚書』の邦訳本を「ちくま学芸文庫」から出版した。９月１日にはネット上のフランス語教育システム「ショコラ」のインタビューに応えてバタイユの魅力について語った。同月１４日にはフランスのカン大学主催の「社会学研究会：ロジェ・カイヨワ、ジョルジュ・バタイユ、ミシェル・レリス」でバタイユの１９３０年代後半の活動を『ドキュマン』に立寄りながら発表を行った。さらに同年１２月１日と２日の両日には法政大学・言語文化センター主催の公開シンポジウム「欲望と表現、バタイユ没後５０年−ポストバタイユ思想の展開」を企画し、８人の発表者の１人として加わって、日本におけるバタイユ受容に関して発表を行った。さらに８人の発表者の原稿を同センターの紀要『言語と文化』第１０号別冊（２０１３年３月）に掲載し、広く世に問うた。まだ同誌第１０号（２０１３年３月）には論文「聖なるものの行方−社会学研究会とそれ以後のバタイユ」を上梓した。このようにバタイユをめぐる１年をたいへん充実したかたちで送ることができた。雑誌『ドキュマン』のバタイユの思想をそれ以後のバタイユの活動から捉え直すことができたばかりか、さらに日本人のバタイユ受容を確認できて、たいへん有意義な１年であった。

（３）２０１３年度

この年度は、『ドキュマン』の多様性に即しながら、それぞれの領域でのバタイユの思想の射程を吟味した。『ドキュマン』から出発してバタイユの思想の幅と深さを検証したということである。特に注目した領野は、哲学、歴史、性理論、エクリチュール（文章表現）であった。発表媒体としては、法政大学文学部発行の紀要（年２回発行）と同大学言語・文化センター発行の紀要『言語と文化』（年１回発行）、および国際学会での発表、さらに単著の出版であった。

具体的にその成果を示すと、『法政大学文学部紀要』には第６７号に仏語論文「ジョルジュ・バタイユのエロチシズムについて―高・低の二元論から連続性・非連続性の二元論への変化」を、同誌第６８号には仏語論文

Hosei University Repository

「ジョルジュ・バタイユと黙示録思想–サン＝スヴェールのベアトス本に基づいて」を発表し、さらに『言語と文化』第１１号には日本語論文「存在と観照–バタイユの論考「８０日間世界一周」をめぐって」を発表した。『ドキュマン』に掲載されたこの論考の私訳も同時にこの号に発表した。また、２０１４年３月にはフランスのミュルーズ大学主催の国際シンポジウム「エクリチュールと断章について」に参加し、「ジョルジュ・バタイユと断章形式のエクリチュール」を仏語で発表した。断章のモチーフがすでに『ドキュマン』時代のバタイユに存在していた点を指摘し、それが後の『無神学大全』に結実していく経緯を明らかにした。他方で単著『魂の思想史–近代の異端者とともに』の二つの章において、『ドキュマン』時代に展開されたバタイユの民族誌学への関心と、同時代の前衛芸術家（ピカソ）および日本人留学生（中谷治宇二郎、岡本太郎）との接点を探った。総じてこの年度にたてた目標（『ドキュマン』とその後のバタイユおよび他の思想との関連の考察）は十分に達成されたと判断している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１１　件）

（１）酒井　健：« Le sacré et la chance – Georges Bataille sur le chemin de l'athéologie »、査読有、*Anamnèse* (Caen, France)、第９号（Actes du colloque international *Le collège de sociologie : Roger Caillois, Georges Bataille et Michel Leiris*）２０１４年、刊行予定、１８９−２００頁。

（２）酒井　健：« Georges Bataille et la pensée apocalyptique – à partir du *Beatus* de Saint-Sever »、『法政大学文学部紀要』、査読無、第６８号、２０１４年、２９−４６頁。

（３）酒井　健：「存在と観照–バタイユの論考「８０日間世界一周」をめぐって」、『言語と文化』、査読無、第１１号、２０１４年、５３−８６頁。

（４）酒井　健：« De l'érotisme de Georges Bataille – changement qui va du dualisme du haut et du bas au dualisme de la continuité et de la discontinuité »、『法政大学文学部紀要』、査読無、第６７号、２０１３年、１−１１頁。

（５）酒井　健：「聖なるものの行方–社会学研究会とそれ以後のバタイユ」、『言語と文化』、査読無、第１０号、２０１３年、１−２８頁。

（６）酒井　健：「バタイユ没後５０年、日本人の継承–三島由紀夫と岡本太郎：歴史性と演劇性」、『言語と文化』、査読無、第１０号別冊、２０１３年、１４５−１６２頁。

（７）酒井　健：「雑誌『ドキュマン』とバタイユの野心–新たな様相の思想」、『言語と文化』、査読無、 第９号、２０１２年、２１−５０頁。

（８）酒井　健：「人体、人間、民族誌学–『ドキュマン』前夜から」、『言語と文化』、査読無、第９号別冊、２０１２年、３３−５０頁

（９）酒井　健：「批判と表出–『ドキュマン』の図像世界」、『言語と文化』、査読無、第９号別冊、 ２０１２年、８７−９８頁。

（１０）酒井　健：「転覆、そして浮遊する空間」、『言語と文化』、査読無、第９号別冊、 ２０１２年、１３５−１４８頁。

（１１）酒井　健：「異種混淆の賭博台–『ドキュマンをめぐって』」、『週刊読書人』、査読無、２０１２年８月１０日号、第２面。

〔学会発表〕（計　３　件）

（１）酒井　健、« Georges Bataille et l'écriture fragmentaire »、Colloque

Hosei University Repository

international *De l'écriture et des fragments*、２０１４年３月２１日、ミュルーズ大学、フランス。

（２）酒井　健、« Le sacré et la chance – Georges Bataille sur le chemin de l'athéologie »、Colloque international *Le collège de sociologie : Roger Caillois, Georges Bataille et Michel Leiris*、２０１２年９月１４日、カン大学、フランス。

（３）酒井　健、« L'évolution d'une altération érotique chez Georges Bataille, du dualisme du haut et du bas à celui de la continuité et de la discontinuité" 、Colloque international *Cinquantenaire de la mort de Georges Bataille : une érotique du mal*、２０１２年３月２３日、ディジョン大学、フランス。

〔図書〕（計　１　件）

（１）酒井　健、『魂の思想史-近代の異端者とともに』、筑摩書房、２０１３年、２８２頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

酒井　健（SAKAI, Takeshi）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：７０２０５７０６